

バツハ・カンタータをきいて 赤岩 栄

バツハ合唱団とバツハアンサンブルの二回の演習を
 ほくは弓町本御教会にききにいった。こういう会
 が定期的に行けられていくことなどは、ほくの若い後
 にはとうてい考えられなかったことである。ほくが
 バツハに関心をもちようになったのは今から三十年
 も前のことで、ミュンヘン・バイエルンのバツハをよんで
 以来である。その後、こんな会があったなら、
 ほくはどんなに喜んだか知れない。

弓町教会の二階席から、カンタータが一番をき
 きながら、ほくは正直に言って、言葉と音楽との
 分裂を感じるのであった。これはむしろ、バツハの
 シェルトでも、出演者の向題でもなく、ほく自身の内
 心における分裂にほかならない。ほく自身として、三
 十年前なら、この分裂は感じなかったであろう。内
 容と音楽との完全な統一というバツハの純粋さは、
 そのまゝ、ほくの内面でも受容されたにちがいない。
 ところが、今のほくにはこのカンタータがたとえは
 デュシヤンのデベレのような気がしてならないのだ。

バツハにとって氣分的にも事理的にも、アト・ホム
 なものが、ほくにとっては、日本的なものとして、きき
 とれないということである。ほくは、ほくの日本性か
 ら無理に引離されて、始めてバツハの世界に帰る
 ことができるのである。ほくがルターの信仰をほく
 の信仰として告白できた三十年前であったなら、
 たぶんほくは現代への追放から帰還するこんな習俗
 と手間とを経験しませんでしたにちがいない。

ほくは目をつむって、あのさびしげない日本語の歌詞
 ーここでほくは、ドイツ語を日本語に訳された訳詞に
 ケチをつけているのではない。これは誰か訳しても大同
 小異、やむをえないことなのだ。ーをもう一度ドイツ
 語に頭の中で還元してみたり、たまたまメロデーの中に
 とかしこんでしまったりしながら、バツハの世界に帰る
 ことを試み、その試みが最後まで中途半端に終わった
 ような気がしている。これは決して、先にも言ったよ
 うに、出演者の負目ではなく、ほくのような聴手の
 宿命なのだ。しかし、こういうやつかしい臆手がいる

ということを知っていたくことも、あるいは会をワテ
 又するかもしれないのだ。この会が更に強力なものとな
 ること、うむをいわず、ほくのような人間を、バツハの
 世界にどうしきつてくれるなら、それこそ、ほくの望
 むところであるから……。あまりにも勝手な期待
 かもしれないが、ほくはこの会が、二回、三回の公演を
 つまみ重ねていくことで、そのような会になることを願
 っている。バツハ自身もモーツァルトとはちがって、この
 ようなつまみ重ね、娯楽の人であったのだから……。

十一月十日、目前にせまった発表会の最後の練習
 を終って外に出た。冬の訪れを告げる、冷い空気が
 上流したほほに氣持ちよかった。
 合唱団発足当時は、ちやうど夏でした。そうい
 う中で歌っている私の足に、ちくりと針をさす、ふ
 らうな蚊がいました。当時私は、悔へ山へと、ホ
 しいフランをいっぱい抱えていましたし、又夕方出か
 けて、夜おそく帰るといふことで、母に反対されたり
 で、練習に出ることが負担に感じられました。でも、

才一回演習会を終って

小山 洋子

歌が好きで団員になったのですから皆と一緒に、何もかも忘れて一生懸命歌った後はいつでも、やっぱり来て良かったと思うのでした。そして九月になると、演奏会もぐっと近づいたような感じで、練習にも熱が入ってきました。この頃になると日曜日の夜が待ち遠しくさえてきてきました。そして十月の初旬に行った軽井沢での親睦会によって、一層雰囲気もなごやかになり、団員も一人、二人とふえてどうやら合唱団らしくなり、今日この記念すべき日を迎えました。この間、四ヶ月余りでしたが、私にとっては苦痛どころの多い、有意義な日々を送りました。

このようにして迎えたバツハ合唱団第一回演奏会は、成功のうちに終り、何よりもまず、森井先生のお蔭が見たかった。ちようど控室を出たところでお会いすると、嬉しそうに笑いながら、遅く出来たわよと一言。今までの緊張が一時に緩んたようでした。

祈から降りてきた雨に、ちりが洗われたように、私の心も精一杯やった悔意感を消えしめた。明日からまた、より深く、バツハを知り、歌い、友達に語り、よりよき生活の糧となるようにしたいと思ひます。

良かった

加藤 剛男

バツハ合唱団初回の感慨。角をすぼめたくなります。何故って、こんなことを書く資格は、ほくには皆無ですから。でもオーケストラの採みとパイオールの荘厳さ、ソプラノの豊か、はじめで融れた地宮先生の指揮。おどりの幹たる森井先生の見守り——こんな中で教員カンタータを歌う機会が与えられたことは、ほくにとって一種の幸福と云えるものでした。

人間として生きていくことに感謝する場合がほくには二つあります。それは邂逅と創造への夢。前川君の思いやりのある言葉について誘われて見聞のつもりで先生のお宅へ訪問したのが確か八月の中旬、残暑なきからの全節でした。今日は、たまたまバツハのものか聞けるなんてとほかいやう。

これは不覚の推測となっていました。「アナーです。ソルフェージュの教員を」。即録がとんでもない方へまわって来ました。(あいつの話では、こんな苦しいなかつたんだか)不意をうたれては、どうしようもありません。「じつは、今日はその……」なんてそんな暇は一瞬もありませんでした。「D.M.S.M.……D.S.」次は亦長調、更声たは響かれ

るばかりです。こんな風にして、初演まで二ヶ月半が経過しました。歌える資格なんかあるはずがありません。だって七回しか出席してないんですから。ごめん下さい。先生の寛容さ。申訳ありません。

邂逅と創造への夢。そうです。出会いがあったのです。バツハに出会いました。演奏会をもつた、演奏が立派だった。良き人であったということ。それよりもバツハに融れたことは、ほくの小さな心臓にも大きな鼓動でした。教会カンタータそのものにもまして、中学の教科書でみるとピンカールしているような頭の、あの体のふっかい、バツハの教に接したと、教つてみたこと、これは受けやりますか、ほくにとつて福音のよきな気がします。良かった。

ちよっと一言。バツハ合唱団。先定すればするほど、値打ちのでてくる名。かんばりたいたいものです。

団員名簿神遺

- アルト 秀村幸子 柳立明正高校二年
 - 世田谷区成城町五〇(四一六・一八九七)
 - ハス よたなつお 後田登都雄 日本大学音楽科三年
 - 武蔵野市 吉祥寺二五四一
- (〇四二二・三・一〇八六)

バツハ合唱団の半年

森井 恵美子

七月一日、さそい合わせた有志が二十名、フツとおしかけてきてひそり。数人でホソく将来の計画なんを話しあうつもりで一日だがみんなの意氣に氣おされて、のっけからカンタートオ一番の譜読み。

八月、梅に山にアルバイトに、忙しい団員から長文のたよりや繪はがきしきり。日曜日の暇にもめげずゆず教名は出席。流金は一度もなかった。

九月、大生きたちは長期末試験になやまされながらも、出席十二名を割ることなくなつた。ハヌも一人二人と強化されてくる。

十月、六、七日のレクリエーションの記念い差境として、オ一回の準備態勢に入る。ソムランのリーダーもあたえられ、各支部のバランヌかとれてくる。

十一月、地宮先生をお迎えしての練習、ろ斯本御教会での練習、と次に本格化し、いよいよ十日のオ一回の憶。二十四名が全刀をあけてあたり、協員の禮象はそれそれには長かとはげましの言葉を残して行かれた。休息と反省のひと

きから、にたちに将来への発展の夢がまされる。

十二月、丹精こめたオ一番、オ七九番カンタータをたまたまえて、十六日いずみ審判訪問。

二十九日クリスマス祝会、これでバツハ合唱団のオ一年目を閉じることになる。

この間、何人もの人がありわかれては消え、十二月現在の正規団員数は初日と同数の二十名(S5・A6・T4・B5)であるが、この不便な会場は、よくかよとおして下さったと、団員

の方々に控く感謝している。団員一人一人の、初めてあらわれた時のことか、私には忘れられない。一人々々かけがえのない存在である。

私の理想の境は、この二十数名によって、すでに地に播かれ、元氣な芽をふいた。もう私はみりの茂むを先取し、これからはじまることにならぬ。探々の困難も、そこに至るまでの一時的過程として、楽しんで受けとる覚悟である。

これまでの私のやり方は、上まかにすべたと思われぬかもしれない。けれども、私自身ではこの半年を、スタートラインにまでこぎつける期向だったと解釈している。魂の出会いと調和、これを私たちの間に、みなさんも感ぜられるとしたら、私の仕事はもう充分成功したといえるのだと思う。あとは、前進しさえすればよいのだ。

合唱団の成長、それは、メンバー各人の心の成長

に正比例する。バツハ合唱団の目的は、目にみえる技術の向上にあるのとはなく、技術の修得を通じて人間そのものをつくることである。バツハと音楽をわから合う。これが私たちである。文字で、広さ、探り、豊か。これらを進いもとあよう。

そして迷わず、ゆたうした足どりで進んでゆこう。

こゝろにはすばらしい私たちの交りをも可能にさせて下さった、周囲の多くの方々のことを、つねに思い、それらの方々の善意にとりかこまれてはいる幸福を、探り味わおう。

私たちにまた豊かな贈物を用意して待っている新しい年を、みんな一つんで迎えよう。

オ13回オルカンとカンタートの会
(オ1回バツハ合唱団公憶) 報告

収入		
前売	43050	
(うち合唱団板)	33400)	
当日売	6600	
計	49650	
支出	72180	
差引不足	22530	
入場人員	240名	
出場者	45名	
(指揮者、独唱者)	5	
(合唱)	24	
オーケストラ	16	

◇ 会後最後に、次の方々からお心づくしのプレゼントがありました。団員一同厚く感謝いたします。

宮本武之助先生(東京神学大学教授 同友)

(伊妻より) コーヒー

木下淑子様(芸人作曲科一年)より

チョコレート

高橋久美子様(団員)より

花砂糖

赤井千穂子様(団員のお母様)より 栗初

いずみ寮 訪問

12月16日午後2時大泉学園駅(池袋から西武線)前集合。お文化なこと・通訳者は直接同駅から西武バスで都民農園までゆき、進行方向に徒歩2分(右手赤松の丘の上)いずみ寮にくる。5時頃辞して、有志は下井草の田反 厚 恵氏宅訪問。6時頃解散。

クリスマス祝会

12月29日午後4時から練習所で。バツハのクリスマスオラトリオを工部披露、讃美歌クリスマスカドル合唱、会食・プレゼント交換。

懇談・9時頃解散。会費(主食・サラダ・果費)50円。他にオイル焼印の材料を各自1人分持ち寄り(調理してそのまま焼けるようにしておく)。交換プレゼントは手持ちのもの、手製のものをよく購入する場合は50円見当。

・この祝会のための物品寄贈はよろこんでお受けします。

・12月30日(日)の練習は休会。新年の計画は追って通知。

団員から

団員の皆さんへ一言

田原 忍雄(洋島家)

そこそこいなかたかといふ具合に合唱の練習をしていながら知らず知らずのうちにこのたよりと書くのです。しかし、近いうちにきっと皆さんの顔を見、声をきくと喜ぶことがあるでしょう。なるべく早くと思っております。その際には、もともと人数も少ない、様に男声がつよくなるよう祈っています。

収入 (14人分)	4400
支出	
通信費	1060
文房具	1120
プログラム運搬 タクシー代	600
車代(地宮先生)	1000
11月号月報	800
7月分謝礼(森#先生)	3000
食器	400
お菓子	1000
	8980
前月の繰越	3320
総計	-1260

(十月会計報告)

	2(金)	4	9(金)	10(土)	11	18	25	平均
S	6	7	8	8	3	1	2	5
A	2	4	8	8	3	2	3	4
T	3	3	5	5	3	2	4	3.6
B	1	4	4	3	4	4	4	3.4
計	12	18	25	24	13	9	13	16

(十月出席統計)